

この度、2月10日及び、2月17日の2週に亘り、見学授業を担当させていただきました。

一口に「文学史」というと、その範囲は膨大で何を教えるべきか戸惑ってしまいます。教員採用試験合格という目標をもつ学生を対象とした授業では、その気持ちはいや増します。今年度初めて教員キャリアの授業を担当する自分にとって、自身の責務の重さを実感した1年となりました。そうした中、2週連続で中島総長先生は授業に参加してくださいました。授業を進行する際に見せる私の戸惑いを敏感に察してくださり、ご指導及び、激励をくださった総長先生にまず感謝を申し上げます。

「文学史」を教える、しかも教員採用試験を受ける学生に教えるとなると、それまでに教えた「文学史」的知識に漏れがないかということに、教員の関心はどうしても傾きがちです。するとアレもコレもと教えることとなってしまい、授業は知識の羅列に終始してしまいます。ところが試験に合格をするために重要なことは、知識の多寡より、それが反射的に思い出せるかどうかということなのです。少なくとも「文学史」に関していえば、問題と解答の対応関係が一問一答式に習熟できているか、きちんと暗記できているかが、得点のカギとなります。ところが教員は、知識の漏れを恐れて贅言を費やし、むしろ学生を混乱させてしまうことがよくあるのが事実です。

この度の授業見学では、こうした知識問に教員が授業で対応する際の心構えを学ばせていただきました。それは、合格に必要な知識のみを腑分けし、その定着をこそ授業では目指し、それ以外にはあえて沈黙を守るということです。教員の洞察力に基づく<教えない勇気>、とでもいえるものだったようにも思えます。試験合格のために必要、不必要な知識を腑分けするということは、その教員の資質・能力が問われます。そこに不安が生ずると、教員はどうしても多くの言葉を尽くした説明をすることとなり、結果として学生に混乱をもたらしてしまいます。試験を控えている学生ならば、それは致命的です。2週に亘り授業に参加して下さった総長先生のご指導は、学生に対する指導の在り方というに及ばず、教員ならばそうした不安を自ら打ち消すことのできる、教員としての確固とした資質・能力、そしてそれらに基づく洞察力を磨く努力をすべきであるという、いわば教師論でもあったように思えました。

社会の発展に貢献できる教師という職業に就くため、教員採用試験の合格を目標として日々努力を重ねている学生の、その努力に報いるためにも、確固とした自身の資質・能力を養い、試験に合格するために必要な知識が腑分けできる洞察力を涵養するとともに、学生の夢を実現する最も効果的な指導方法習得のため今後とも邁進してゆく気持ちを、今回の2週に亘る授業を通じて新たにいたしました。